

## 美術館病、あるいは展示価値の 아우ラ

La mal du musée, ou l'aura de la valeur d'exposition

郷原佳以

Kai Gohara

あの、高山病のような、一種の美術館病を覚えるには、どこでも傑作が大量に集められた場所に入りさえすればよい。

フランシヨ「美術館病」

0 はじめに

ミシェル・フーコーは一九六四年、「幻想の図書館」において、一九世紀に確立された図書館という知の装置が文学そのもののありようを変貌させたことをフローベールの著作を通して示してみせた。そのなかで彼は、フローベールと図書館の関係を手ネと美術館の関係に準え、手ネによって最初の

「『美術館用』絵画」<sup>1</sup>が誕生したと述べている。「美術館用『絵画』とは、現実や物語などの主題よりも過去の絵画に依拠して描かれた絵画、言い換えれば、過去の作品のアルシヴとしての潜在的な美術館の存在を前提とし、作品同士の関係性のうちに存在する絵画のことである。

手ネによって達成された芸術の自律を想像上の「美術館」という形象に結びつけたのはフーコーが最初ではない。一九四七年から一九五〇年にかけて、アンドレ・マルローは『芸術の心理学』と題された三巻から成る大型の美術書を刊行した。それらはいずれも、第一巻で提起された独自の理念に基づいて、カラーの写真複製図版を多数収載している。独自の理念とはすなわち、第一巻の表題でもある「想像の美術館」である。周知のようにマルローは、手ネに

よって切り拓かれた近代芸術は過去に創造された世界中の芸術作品を「迎え入れ、秩序づけ、変貌させる」<sup>2</sup>と考へ、その体系に「想像の美術館」という名を与えた。そしてそれは、世界各地に散らばる多種多様な芸術作品を写真複製によって「望のもとに収めることのできる書物として思い描かれたのである。「想像の美術館」とは、したがって、複製技術の可能性を最大限まで推し進めたところに仮定的に見出されるはずの、世界中の作品を収蔵した、理念としての（美術館）のことである。

この理念をめぐるさまざまな批評が湧出したが、そのなかには文芸批評家モーリス・ブランシヨのそれもあった。ブランシヨは、一九五〇年に『芸術の心理学』三部作が完結するや、長文書評「（美術館）、（芸術）、（時間）」を寄せ、さらに一九五七年にも、ジョルジュ・デュテユイによるマルロー批判の刊行を機に、「美術館病」という奇妙な表題の論考を発表している。本稿では、美術館論として読める「この二篇の論考を讀解し、マルローとブランシヨの芸術観の相違を探りつつ、ブランシヨの言う「美術館病」が芸術作品といかなる

関係を切り結んでいるのかを問う。以下ではまず、マルローの「想像の美術館」理念の特徴を把握し、次に、その対極にある反美術館の思想を整理する。そのうえで最後に、両者のいずれにも与しないブランシヨの論考を分析する。焦点となるのは、芸術作品の時間性、しかし、アナクロニズムな時間性である。二種類のアナクロニズムが描き出されることになるだろう。

1 アナクロニズム<sup>(1)</sup> —

マルロー…反美術史としての「想像の美術館」

マルローの構想の革新性を知るために、当時の受容を概観することから始めよう。『芸術の心理学』は、三部作の第一巻「想像の美術館」が一九四七年末に刊行されるや大変な評判を呼んだ。続いて第二巻（一九四九）、第三巻（一九五〇）が刊行されるとすぐさま各国語に翻訳され、国内ではアルベール・ガガン、ガエタン・ピコンといった錚々たる文芸批評家から好意的な書評を寄せた。一九五〇年二月から五年一月